

唐招提寺藏『孔雀經音義』院政期点の声調体系

— 反切を有する前半部分について —

佐々木 勇

一、問題の所在

中国において考案された反切は、漢字の音と声調とを示す方法である。その音と声調とは、時とともに変化する。ところが、『切韻』反切に代表される中古音の規範が長く守られた結果、反切音と現実音とのずれが生じた。¹⁾

日本においても、中国と同様であった。

反切の三大出典といわれるのは、基本的に中古音の体系を反映する『玉篇』『切韻』『玄心一切経音義』でありながら、日本漢音の読誦音は、唐代中国の現実音（秦音）を反映していたからである。²⁾

日本の古訓点資料には、このずれをそのままにした資料と、修正した資料とが存する。古訓点資料を概観すると、以下のようなことになる（初期の状態を知るため、平安・鎌倉時代の訓点資料に依り、音形と声調とに分ける）。

音形では、ずれをそのままにする資料が多く、反切は中古音のものを探りながら、仮名で秦音を示す。比較的早い資料として、十世紀末〜十一世紀初頭に加點された醍醐寺本『妙法蓮華経釈文』が指摘されている。³⁾ その他、漢籍訓読資料中に中古音を反映する反切・直音注の書き込みが存しながら、仮名書き例は秦音に一致する場合もその例である。また、現代の漢和辞典に反切と日本漢字音とを掲げる場合も、このずれが見られる。⁴⁾

これに対し、反切音と現実音とを近づけたものに二通りある。一つは、反切に合うように理論的に音を作り出す場合であり、いま一つは、中古音反切ではなく、秦音を反映した反切を引く場合である。⁵⁾

一方、声調も中古音と秦音とは異なっていた。全濁声母の無声化によって、声調が陰陽（軽重）に分かれ、全濁上声の調値が去声と等しいことが表面化し、調類としても去声とされるようになった。いわゆる「全濁上声の去声化」である。しかし、唐代に入って

も、反切声調は中古音声調に合わせるのが一般的であったようで、切韻系韻書以外でもその傾向がある。⁸³⁾

ただし、声調を示す声点の実態は、異なる。諸資料の声点は、次のように、「A. 中古音の四声の枠を越えないもの」と「B. 全濁上声の去声化を反映するもの」とに大別できる。

A. 中古音の四声の枠を越えないもの

仁和寺藏『佛母大孔雀明王經』平安中初期頭点⁸⁴⁾

『毛詩』唐風殘卷平安中期点⁸⁵⁾

醍醐寺本『妙法蓮華經釈文』の掲出字声点⁸⁶⁾

圖書寮本『類聚名義抄』朱声点・朱仮名音注⁸⁷⁾

高山寺本『孔雀經單字』鎌倉初期朱声点⁸⁸⁾

右の五資料は、全濁上声字にすべて上声点が加點され、去声点を差すことがない。

B. 全濁上声の去声化を反映するもの

日本漢音資料のうち、全濁上声字にすべて上声点を加點したものとして現在知られている平安・鎌倉時代の資料は、右に掲げた五資料である。その他の字音直読資料・訓読資料には、割合の差は存するが、全濁上声字に去声点が加點されている。⁸⁹⁾

この事実から、日本漢音の中心的声調体系は、平声・入声に軽重を区別する平声・平声軽・上声・去声・入声・入声軽の六声体系であり、その去声には中古音の全濁上声が含まれるものと考えられている。⁹⁰⁾

本音義は、不空訳『佛母大孔雀明王經』三巻の漢字を出現順に抄出し、それに音注を加えた巻音義である。本文は、漢字に反切を注した前半（一オウ一八ウ）と、『佛母大孔雀明王經』中の陀羅尼を集めた後半（二〇オウ三〇ウ）とで成る。

本音義の本文には、わずかな仮名音注と豊富な声点とが朱筆で加えられている。この朱筆は、仮名字体から、院政期のものと考えられている。⁹¹⁾

2. 本資料の反切

筆者は、注7引用別稿において、本音義の反切について考察を加えた。いま、本音義掲出字と反切下字の声調を『廣韻』によって整理した表を、別稿から引用する。

反切 下字	掲出字		
	平	上	去
去	3	2	77 14 51 41
上	71 24 31 43	2 2 1	2 2
平	128 33 80 77	2 2 1	3 2 1

(空欄は、例が無いことを示す。)

そこで、上分類Aの五資料は、理論的に韻書によって加點されたものとされている。また、全濁上声字の全例に上声点が加點されるのではないが、反切書き込みが比較的多い天理図書館蔵『蒙求』鎌倉末期点では、その反切の影響によって全濁上声字に上声点が加點された例が存すると解釈されている。⁹²⁾

右のごとくにまとめてみると、反切を有する辞書・音義や、反切の書き込みが存する比較的古い訓点資料に、中古音声調をそのまま加點したものの(A)があることが知られる。⁹³⁾

ここで、反切を有する辞書・音義類には、現実の声調を示した資料はなかったのかどうか問題となる。音形については、現実音を仮名で付した辞書・音義が存するからである。

本稿は、そのような資料として、院政期加點の唐招提寺藏『孔雀經音義』(以下、本音義ともいう)を指摘するものである。

二、唐招提寺藏『孔雀經音義』の概要

1. 唐招提寺藏『孔雀經音義』略説

唐招提寺藏『孔雀經音義』は、森本孝順蒐集本として『唐招提寺古写経選』(一九七五年、中央公論美術出版)に解題とともに部分写真が公開され、『北大国語学講座二十周年記念 論輯 辞書・音義』(一九八八年、汲古書院)において、石塚晴通によって、論文・漢字索引とともに全巻写真が公刊された資料である。⁹⁴⁾

上記のとおり、掲出字と反切下字の中古音四声は、ほぼ一致する。⁹⁵⁾

よって、この反切下字の声調に合わせて掲出字声点を加點すれば、全濁上声字にも上声点を加點することとなる。

3. 本資料の声点

本資料の声点を、中古音の枠で整理するのに先立ち、声点加點の全体像を見ておく。

A. 声点加點数

本音義前半の掲出字数は、八四二字である。(そのうち、「覺」[樂]がそれぞれ別音で二回掲出されており、「吐」が同一反切を注して重出しているので、異なり字数は、八三九字となる。)

この八四二の掲出字のうち、約九四%にあたる七九〇字に声点が加點されている。⁹⁶⁾

次に、反切への声点加點数を数える。概要を知るために、第一反切の星点のみを数える(声点が予想される部分が虫損の例へ上字十例、下字三例)は除外する)。

すると、声点加點数は、延べ数で、反切上字が三七六字、反切下字は六〇五字を算す。掲出字には、原則として声点が加點されていたのに比して、少ない。⁹⁷⁾

反切上字と下字との声点加點の実態は、次のようである。

ア. 反切上字・下字とも加點する例——三三四例
 イ. 反切下字にのみ加點する例——二六九例
 ウ. 反切上字にのみ加點する例——三二一例
 よつて、反切下字に、より加點の必要性があつたと考えられる。
 これは、反切下字が声調を示すためであらう。²⁴⁾

B. 形式

① 星点

本音義声点の大部分は、星点である。
 掲出字声点は、単点のみで双点(いわゆる濁声点)が無いが、反切字には濁声点が見られることが指摘されている。²⁵⁾
 反切上字には、十一例の濁声点加點されている。これらは、すべて次濁字である。

反切下字には、十六例の濁声点加點されている。このうち、十四例は次濁字であるが、「卜・癸」の二字は清音字である。「卜」は、『蒙求』の東洋文庫蔵本鎌倉後期点以下諸本でも濁声点加點されていることから、日本漢音として、いわゆる濁音であつたものと思われる。「癸」に濁声点加點されている理由は、不明である。

② 圈点

圈点は本音義全体で、四〇例である。圈点のみが加點されることはなく、必ず星点とともに加點されている。よつて、圈点は、他資料と同様、星点を補うものである。²⁶⁾

以下、圈点四〇例を、加點位置別に掲げる(圈点は、(○平)などとして記す。454・3等は、所在を『北大国語学講座二十周年記念論輯 辞書・音義』の頁数と行数で示したものを。以下同じ)。
 平声点

- 〈全濁字〉從^{平聲(○平)} 454・3 跳^{平聲(○平)} 457・6 便^{去聲(○平)} 464・2
- 乘^{去聲(○平)} 470・2 士^{上聲(○平)} 470・5
- 〈次濁字〉鬢^{去聲(○平)} 470・8
- 〈全清字〉訶^{平聲(○平)} 465・3

全清字一例を除き、全濁字または次濁字であり、日本漢音声調の原則に一致する。

平声軽点

- 〈全清字〉針^{平(○平)} 461・1 朝^{平(○平)} 463・2 增^{平(○平)} 468・7
- 相^{去聲(○平)} 457・8 障^{去聲(○平)} 466・2 屍^{去聲(○平)} 467・8
- 瓮^{去聲(○平)} 473・1
- 〈次清字〉豊^{平(○平)} 461・7 川^{平(○平)} 467・7 峯^{平(○平)} 470・4
- 称^{去聲(○平)} 460・3

すべて全清・次清字であり、日本漢音声調の原則に一致している。上声点(所在の後にへ)に入れて『廣韻』記載の声調を記す。)

- 〈全濁字〉断^{去(○上)} 450・6 視^{去(○上)} 457・6
- 下^{去(○上)} 466・6 肚^{去(○上)} 459・5
- 婦^{去(○上)} 465・8 罪^{去(○上)} 465・2

- 〈次清字〉赤^{入聲(○上)} 472・3

当該字声母は、さまざまである。当時の日本漢音声調において、入声の輕重に揺れが大きかつたことに関連するのであらう。²⁸⁾

以上、声点加點の概要を見た。その結果、掲出字には原則として声点を加點する方針であつたこと、反切下字に加點が多いこと、圈点は中國中古音の規範に合つた加點であることが知られた。そして、星点には、全濁上声字に去声点を加點する例が存した。

三、声点の整理

本音義の声点については、先引石塚論文で、巻頭五丁分の調査がなされている。²⁹⁾

そして、声調体系に関わる点として、次の諸点が報告されている。要約して、記す。

- ① 掲出字・反切字声点とも、六声体系である。
- ② 掲出字の声点は、原則として中古音の枠を守っている。
- ③ 反切字の声点は、切韻系韻書に合わないものがあり、読誦音に基づいて加點されている。

④ 掲出字と反切下字との声点に、相違のあるものが存する。右の指摘を参照しつつ、掲出字・反切上字・反切下字に分けて、本音義の全体を調査してみる。なお、圈声点は先に全例を掲げたの

- 〈全清字〉瘵^{平聲(○上)} 458・6
- 〈次濁字〉與^{平(○上)} 461・7 罵^{去(○上)} 465・3
- 全濁上声字が多いことが注目される。これは、中国における声調変化「全濁上声の去声化」に関わるものと解される。全濁字六例のうち、「断・視・下」の三字は、『廣韻』に去声・上声の両声で挙げられている。しかし、孔雀経中の当該箇所では、いずれも上声の意である。すなわち、全濁上声字に星点は去声点を加點し、圈点がそれを上声に訂した例となる。

「肚・婦・罪・瘵」の四字は、『廣韻』に上声の記載のみであり、圈点はそれと一致する。平声輕重の区別が、圈点では正確であつたことと通じ、圈点が中古音の規範に則つた加點であることが知られる。

去声点

- 〈全清字〉遍^{平聲(○上)} 447・6 散^{上(○上)} 465・4
- 將^{平聲(○上)} 467・3
- 〈次濁字〉難^{平(○上)} 452・3
- 〈次清字〉懂^{平(○上)} 471・4

圈点は、『廣韻』に記載された声調とすべて一致する。入声点

- 〈全濁字〉及^{入聲(○上)} 449・6 獲^{入聲(○上)} 456・4 合^{入聲(○上)} 465・1
- 〈次濁字〉目^{入聲(○上)} 455・2 帆^{入聲(○上)} 471・7 腋^{入聲(○上)} 472・2
- 〈全清字〉雪^{入聲(○上)} 462・8

で、以下の記述は星点に限る。

1. 掲出字声点

ここで、掲出字声点(星点)を、『廣韻』の体系で整理してみると、後掲表1の如くである。²⁹⁾

石塚論文の指摘のとおり、平声軽・重の対応原則には比較的良好適っている。また、入声は、大部分軽声であるが、重声は全濁字に集中している。

さらに重要な点として、全濁上声字は、去声点加点点例の方がやが多いことが知られる。これは、石塚論文の指摘(②)と異なる。

本音義掲出字中、全濁上声字に声点加点点が存するのは、次の三十二字である。出現順に掲げる。³⁰⁾

i) 去声点加点点例「十八例」

近 _去	453	造 _去	457	規 _去	457	6	肚 _去	459	5		
杖 _去	460	4	善 _去	462	3	聚 _去	464	4	罪 _去	465	2
婦 _去	465	8	下 _去	466	6	坐 _去	466	7	静 _去	467	6
弟 _去	468	5	稻 _去	470	8	禍 _去	473	6	痔 _去	475	2
象 _去	477	1	旱 _去	482	3						

ii) 上声点加点点例「十三例」

氏 _上	447	7	是 _上	448	5	受 _上	451	8	解 _上	452	7	胫 _上	459	6
道 _上	464	6	父 _上	466	1	士 _上	470	5	奉 _上	473	8			

3. 反切下字声点

同様に処理すると、後掲表3となる。

平声は、重点がほとんどであり、全清字に軽点がやや多いものの、軽重の区別が明確でない。入声では、全体として軽声が多く、全濁字で入声軽・重がほぼ同数であるが、有意の差かどうか不明である。おそらく、反切下字声点は、軽重の区別にはられた注意が少なかったであろう。

全濁上声字は、上声点と去声点の例数がほぼ等しく、掲出字の状態に似ている。

四、結論

本稿の目的は、反切を有する辞書・音義類で、現実の声調を示した資料はなかったのかどうかを調べることであった。その可能性が存する資料として、唐招提寺蔵『孔雀経音義』を取り上げ、検討してきた。

本音義の反切字声点については、読誦音に基づいて加点点されていることが、すでに指摘されていた。本稿の分析の結果、反切字声点ばかりでなく、掲出字声点にも全濁上声字への去声点加点点例が比較的多く見出せた。反切声調が掲出字の中古音声調に合致する本資料に、漢音声調を反映する声点が加点点されていた。³¹⁾

動_去 474・8 珍_去 475・4 嗽_去 475・4 儉_去 480・7

iii) 上声点・去声点加点点例「二例」

在_上 453・3

石塚論文の対象範囲は、457・2の「被」までであり、その範囲では去声点加点点例二例に対し上声点加点点例五例となる。しかし、本資料全体では、右のとおり、去声点加点点例の方が多い。

なお、先に見たごとく、圈点で上声に訂正している例が五例見られる。これと、全濁上声字に上声点を加点点した例が冒頭に多いことから、調値が去声と同一になっても全濁上声字は上声に属するとするのが、当時の規範的態度であったものと考えられる。³²⁾

2. 反切上字声点

反切上字声点を『廣韻』の体系に当てはめると、後掲表2の如くである。

平声軽重の対応は、ほぼ原則通りである。入声は、例が少なく判然としないが、全濁字は十例中九例に重点が加点点されており、掲出字声点と異なる。

全濁上声字は、去声点加点点例が多数である。この点も、掲出字声点と異なり、注意される。

この点、本音義と反切が多く一致する醍醐寺本『妙法蓮華経釈文』・同時期に加点点された図書寮本『類聚名義抄』・同經典の音義である高山寺本『孔雀経單字』等と異なる。

本音義は、日本漢音に一致する秦音系反切を比較的多く引用している。本稿の検討によって、声点による声調表示においても、現実の漢音声調を反映していることが知られた。

五、孔雀経字音点との比較

右の「現実の漢音声調」とは、孔雀経読誦声調であることが期待される。

しかし、ここで、問題が生じる。なぜならば、孔雀経古訓点資料の分析によって、孔雀経字音点には、全濁上声の去声化例が比較的小さいことが報告されているからである。これは、大東急記念文庫蔵寛治五年(一〇九一)点および東京大学蔵鎌倉中期点によって言われたものである。³³⁾

ところが、孔雀経字音点は、このようなものばかりではない。筆者は、注7別稿において、全濁上声の去声化例が比較的少ない資料として龍門文庫蔵延慶二年(一一三〇九)点を加えるとともに、全濁上声字に対する上声点・去声点加点点例数が、ほぼ等しい孔雀経字音点資料が存することを指摘した。その資料とは、次の三点である。(a・bは、沼本克明先生からお借りした写真・移点本に依る)。

- a 東寺藏院政期点(第十四函一号)
- b 仁和寺藏建久八年(一一九七)頃点
- c 国会図書館藏元応二年(一一三二)点

別稿では、その事実を記したのみであった。そこで、本稿では、右の三点を中国中古音声調・清濁と対照させた表(表4・5・6)を掲げる。なお、対象は、唐招提寺藏『孔雀經音義』掲出字の当該箇所にあたる用例に限定した。

これらの表の例数が本音義に比して多いのは、複数の声点を加点する場合があるためである。その理由は不明であるが、呉音声調が混入しているものかもしれない。よって、全濁上声字への去声点加点数例も、割り引いて見る必要がある。しかし、この三点は、全濁上声字への上声点加点数例が圧倒的に多い孔雀經字音点とは、様相が異なる。

すなわち、孔雀經読誦音は全濁上声の去声化について一様ではなく、本音義声点は、全濁上声字の半数程度が去声化した読誦音を反映していることが出来る。

六、掲出字・反切上字・反切下字各声点の比較と考察

右に、本稿の結論を述べ、それが不自然でないことの確認を終えた。これまでは、掲出字・反切上字・反切下字各声点を区別して整理

しながら、それぞれについて考察することをひかえてきた。最後に、各声点の比較と考察とを行ないたい。

各声点を整理した表1・2・3には、差異が見られた。

掲出字声点(表1)は、孔雀經字音点(表4・5・6)および院政期の他の字音直読資料・訓読資料の実態に類似している。³³⁾

しかし、反切上字声点は、それとくらべて軽重の区別が厳密である(表2)。一方、反切下字声点は、反切上字声点に比して、全濁上声の去声化例が少ない(表3)。

この事実は、次のように解釈できる。

反切上字は、掲出字の軽重清濁を示す。よって、軽重の区別は厳密である。ただし、掲出字の四声表示には関わらないので、全濁上声の去声化例が多くなった。

反切下字は、掲出字の四声を示す。よって、全濁上声字の去声化の割合は、掲出字と同程度である。ただし、掲出字の軽重表示には関わらないので、軽重の区別に注意をはらわなかった。

右の解釈が正しければ、本音義の声点加点者は、醍醐寺藏『妙法蓮華經釈文』とおなじく、反切の役割に応じた加点をしていたことになる。³⁴⁾

また、注意が向けられない場合に出てくる事象(反切上字声点における)全濁上声の去声化、(反切下字における)軽重の乱れは、当時の日本漢音声調の実態が現出したものと考えられる。³⁵⁾

以上、反切上字・下字の役割を考慮した声点加点であることを指摘すると同時に、本音義声点に当時の日本漢音声調が反映されていることを確認した。

注

- (1) 今日でも漢語の押韻は、切韻系韻書のそれを基本とし、漢和辞典に記される反切も中古音を示す韻書から採られている。その状況で、『韻鏡音義』反切は、希な例である。小川環樹『唐詩の押韻——韻書の拘束力』(『中国語学研究』(一九七七年、創文社)、参照)。
- (2) 高松政雄『中古「正音」(『国語国文』四四卷六号)、沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』(一九九七年、汲古書院)六一頁、等参照。
- (3) この実態を体系的に示したのもとして、沼本前注書が挙げられる。
- (4) 沼本克明『日本漢字音の歴史』(一九八六年、東京堂出版)二二七頁。
- (5) たとえば、諸橋轍次『大漢和辞典』凡例には、「反切は集韻・廣韻を中心とし、更に廣く各種の韻書・字書を渉猟してこれを掲げた。」「漢音・呉音は反切に本づき、実際の用例を参酌して決定し、(以下略)」とある。
- (6) 沼本克明『漢籍訓点資料記載の字音——漢書訓点資料の場合』(『国語国文』第三八卷八号、一九六九年八月、沖森卓也)『延久鈔史記の訓読について——助字を中心とした訓法と字音』(『白百合女子大学研究紀要』第十五号、一九七九年十二月、参照)。
- (7) ある程度まとめて引くものとして唐招提寺藏『孔雀經音義』を挙げる(とができる。佐々木勇『唐招提寺藏『孔雀經音義』の反切について』(『訓点語と訓点資料』第一〇六輯、二〇〇二年三月、参照)。
- (8) 大島正二『唐代字音の研究』(一九八一年、汲古書院)、狩野充徳『文選音決の研究』(二〇〇〇年、淡水社)、参照。日本においても同様で、全

濁上声字を去声の反切下字で注する反切のある程度数指摘できる韻書『一切経音義』のような資料は、見出されていない。

- (9) 沼本克明『仁和寺藏重文孔雀經字音点——漢音声調史料としての位置づけ』(『訓点語と訓点資料』第五五輯、一九七四年十一月、後、修正して『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』に所収)参照。
- (10) 前注沼本著書第一二部第四章第一節、参照。
- (11) 声点加点者は、「平上去入依下字、軽重清濁依上字、濁平声字軽重、濁上声字重軽(以下略)」の表紙見返記事のとおり、反切によって掲出字の声調を知った。それを助けたのが、反切の声点であった。佐々木勇『醍醐寺本『妙法蓮華經釈文』の声点加点について——前後半の相違と表紙見返中段記事の解釈』(『訓点語と訓点資料』第一〇三輯、一九九九年九月)参照。
- (12) 小松英雄『圖書寮本『類聚名義抄』にみえる特殊な注音方式とその性格(上)』(『訓点語と訓点資料』第十輯、一九五八年十月)・同『圖書寮本『類聚名義抄』における(正音)の体系Ⅱ』(『日本声調史論考』(一九七一年、風間書房)第二部第二章)・注9沼本著書第一二部第五章、参照。
- (13) 石塚晴通『孔雀經單字 解題』(『古辞書音義集成』17)一九八三年、汲古書院)。
- (14) 正保四年(一六四七)書写の高山寺藏『理趣經』も鎌倉初期の姿をとめているようであり、これに加えることができる。しかし、書写時が降るので、いまは除外した。沼本克明『読誦漢音に於ける学習音の介入——蒙求字音点の場合』(『鎌倉時代語研究』第十輯(一九八七年五月)、後『日本漢字音の歴史的研究』所収)参照。
- (15) 頼惟勤『漢音の声明とその声調』(『言語研究』一七・一八合併号、一九五一年三月)・柏谷嘉弘『圖書寮本文鏡秘府論の字音点』(『国語学』第六八集、一九六五年六月)・注9沼本著書第一二部第五章・佐々木勇

〔家求〕における日本漢音調の伝承と衰退」〔訓点語と訓点資料〕第九九輯、一九九七年三月等、参照。

(16) 日本漢音形が唐代秦音体系に一致することから、その声調も秦音の声調体系を反映するものであろうとされている。平山久雄「中原音韻」入派三声の音韻史的背景」〔東洋文化（東京大学東洋文化研究所）五八（一九七八年三月）、参照。

(17) 注14 沼本論文、参照。

(18) 現行の漢和辞典も、中古音の四声を示しており、この延長線上に捉えら

れる。

(19) 注7 佐々木論文、参照。

(20) 石塚論文、参照。調査は、『北大国語学講座二十周年記念 論輯 辞書・音義』（一九八八年、汲古書院）所収の写真版および花野憲道氏より借りたカラー写真に依る。

(21) 大勢からはずれる例は、孔雀經本文の当該掲出字音とは異なる音を反切が示す場合が大部分である。

(22) 声点が加えられない漢字に音の上で共通点は見出せない。声点無加声点の最初の例は、掲出字四八一番目「養」であり、後半に偏っている。また、数字連続して声点が加えられない場合がある。あるいは、移点時の目移りなどによる落ちかも知れない。

(23) 掲出字に声点が加えられ、反切には声点加声点が存しない掲出字一五〇字、反切に声点が加えられ、掲出字には声点加声点が存しない掲出字一三字、である。

(24) 図書寮本「類聚名義抄」においても、右と同様な調査がすでになされている（小松英雄「日本声調史論考」一四九・一五〇頁。図書寮本「類聚名義抄」においては、イがもつとも多く、アは比較的少ない。ウは、皆無に近い。図書寮本「類聚名義抄」において、イ、反切下字にのみ加声

する例が多い理由として、軽重の区別をも含めて、反切下字声点で掲出字の声調を示したとする解釈が示されている（同上、一五三頁）。

(25) 注13 石塚論文。なお、図書寮本「類聚名義抄」でも、掲出字は単点のみで、反切字には双点が見られる。これについて、掲出字声点が反切字声

点よりも古いとする考えがある（小松英雄「日本声調史論考」四〇〇頁。図書寮本「類聚名義抄」にも、同じ掲出字「水」に、同じ「戸突反」〔玉

篇の反切〕が注され、反切下字「登」に、上声単点加声点されている。

(27) 圏点は、「益」（十四オ一）を最後に加えられなくなる。加声途中であつたものかもしれない。

(28) 注15 諸論文に挙げられている具体例、参照。注13 石塚論文では、本音義の平声軽点の中古音ときれいに対応するが、入声軽点が多い例が指摘されている。

(29) 「唐招提寺藏孔雀經音義」〔北大国語学講座二十周年記念 論輯 辞書・音義』（一九八八年、汲古書院）所収。

(30) 本資料は、卷音義なので、掲出字の意味を特定でき、「廣韻」に複数音が掲載されている場合も一つに絞ることができる。『廣韻』に当該字が無い場合は、除外した。なお、本資料には、誤写と考えられる例が少なくない。それらも、除外した。表を縦にみて、最も多い欄とその半数以上の欄とに網掛けを施した。以下の表も同様である。

(31) 石塚論文では、「上」を全濁上声字として処理している。しかし、經本文「地上」の箇所あたり、意味上は去声であり、反切下字も去声字である。したがって、本稿では、去声とした。

(32) 図書寮本「類聚名義抄」・高山寺本「孔雀經單字」等の声点加声点は、このようにして生まれたものと思われる。

(33) 「聚」才句「4」の例では、反切下字「句」は、平声・廣韻／去声・侯韻であり、掲出字「聚」の音に合うのは、平声の廣韻である。

しかし、去声点が加えられている。反切字声調と声点とが一致しない例である。

(34) 注9 沼本著書第一部第五章、参照。

(35) 注15 諸論文に挙げられている具体例、参照。

(36) 注11 佐々木論文、参照。

(37) この考えが認められるならば、声点加声点者の漢音声調は、掲出字より全濁上声の去声化が進み、軽重が乱れたものであったことになる。それを、反切の支えによって、修正しつつ加声したことになる。孔雀經字音点の声点加声全体に及ぶ問題であるため、稿を改めて考察したい。

〔付記〕

本稿は、平成十年度鎌倉時代語研究会夏期研究会（一九九八年八月二日）での発表を元に、趣旨を変えて全面的に改稿したものである。席上、沼本克明先生から貴重なご意見をいただいた。記して御礼申し上げます。

—— Koyama・いさむ、本学教育学部助教授 ——

表4 東寺藏院政期点の声点

廣韻 ノ点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	
平	61	11	71	70	14	6	10	12	22	3	11	13	2		1	2	309
平輕	52	19	7	3	5	1	3	1	9	1	1						102
上	18	3	3	4	59	18	13	36	6	4	5	9					179
去	6	2	10	10	6	5	11	7	66	8	35	24					190
入輕													49	8	21	31	109
入													13	2	15	9	39

表5 仁和寺藏建久八年(1197)頃点の声点

廣韻 ノ点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	
平	48	13	64	69	7	1	6	2	25	6	12	11	1			1	266
平輕	78	17	16	6	1		1	1	4	2							126
上	8	1	5	1	67	19	23	40	8	3	5	6					187
去	6	1	6	5	7	5	13	5	72	13	44	34					211
入輕													55	9	21	33	118
入													13	3	13	13	42

表6 国会図書館蔵元応二年(1321)点の声点

廣韻 ノ点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	
平	75	12	68	58	6	2	6	2	7	1	6	2	1				246
平輕	48	17	5	9	2	1			4	3							89
上	14	4	7	6	62	19	18	41	6		2	9	1				189
去	5		4	7	6	4	17	1	70	13	45	33					205
入輕										1			40	7	23	29	100
入									1				26	3	15	11	56

表1 掲出字の声点(星点)

廣韻 ノ点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	
平	12	8	72	71	1										1		165
平輕	97	23	4			1			1								126
上					59	17	15	40	2		1	1					135
去	1			2	1	1	19		75	17	46	37					199
入輕													59	10	22	37	128
入													3		12	2	17

(数字は延べの例数である。空欄は用例が無いことを示す。以下同じ。)

表2 反切上字の声点

廣韻 ノ点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	
平	17		63	46	3												129
平輕	52	14	1		4												71
上	1			1	34	12	6	21	1								76
去		1				2	25	2	8	3	6	1					48
入輕													13	5	1	8	27
入													4	1	9	1	15

表3 反切下字の声点

廣韻 ノ点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	
平	49	1	43	70					1							1	165
平輕	62	2	5	2													71
上					47	7	9	39	9			4					115
去	1	1			3	1	12	5	64	5	25	40	1				158
入輕													34	1	6	33	74
入													10		7	5	22